

●座談会

◆◆グラスの向うに探検部の足跡と未来が見えた◆◆

(先輩3氏と酒を酌み交わして)

日時 昭和55年10月14日 午後7時～9時

場所 新橋飯店

出席者 初代 小野 龍 弥 22代 高 見 雅 樹

6代 村岡 威彦 24代 栗本 雅也

16代 渡部 里美 24代 水野 浩

25代 織田 晃 敏

25代 室 沢 治 久

進行 23代 松原 保

松原 本日はお忙しいところをお集まりいただき
どうもありがとうございます。探検部も数年前ま
での部員減少傾向がおさまり、ここ2・3年、数
の上でかなり充実してきたんですが、活動という
面では部内の雰囲気もう一つ盛り上がっていない
ように思います。関西大学創立100周年を5
年後に控えていることでもあり、今夜の話し合い
を契機として部内の士気を高めて行きたいと思っ
たりしていますので、何か役に立つような話や経
験を聞かせていただければませんか。

高見 探検部は今、一つの転機を迎えて進むべき
方向を見失いかけているように思えるんですが、
20年余りの間で先輩方が経験された、探検部の
転機という様なものがありましたら。

小野 探検なんて事ができる様になったのも、言
うなれば、高度経済成長時代が始まってからです
ね。それとともに、やりたいことがやれるように
なってきた。

村岡 昔は沖縄へ行くことが大目標やったからね。

小野 今ではもう世間が探検に対して興味を失っ
とる。海外へ出ることもなんか珍しくないからね。

うちの探検部が20数年一つの組織としてやって
きた特性と言うと、登山部や潜水部に先駆けたと
とをする。カヌー・ボートにしても然り、そうい
う世間的に新しいレジャー技術を創造する一つの
パイオニアであったということや、我々が潜水や
ボートをやった後からブームが追い駆けてきたか
らね。だからそういう意味での先兵であったことは
確かかな。まあそんな中で転機と言うと、学園
紛争の時かな。

渡部 あれば全国の大学自体が一つの転機を迎え
た頃ですね。

栗本 その頃は僕らまだ小学生だったんで、バリ
ケードとかゲバゲバなんて言うことを断片的に知
っただけでしたが、実際にはどんなものだったん
ですか。

小野 あの頃探検部は技術集団並やかなりしでね。
私が探検委員長をしていた時だったが、それがど
ういう動きやったかは未だに分らない。しかし何
か、体制に対して反対を唱えることが全ての学生
の正義につながるような一つのブームだったね。
当時は学校へも入れない状態で、探検部の連中も
何か分らんまま騒いでるんや。それで私がワラ半
紙買って来て「お前らは探検部をつぶす気か、言

いたいことはこゝへ書け。」と言って、誰の下宿やったか、3ヶ月位毎週通った。そして要するに、学校のことはどうでも良い、あくまで探検部長として探検部をどうするべきかを論じ合ったんや。あの頃の記録は誰が預ったのかなあ、自分で保存しとけば良かったと思う。

村岡 そりゃもう無いわ。(笑)

小野 あの時はね。本当に苦しかったよ。しかしね、ワラ半紙は全部書き尽したよ。それによって探検部をやめた者も残った者も、各人が真剣に考えたよ。そして結論として出てきたのが、探検部は今後文化会でも学友会でもない、独立した活動をしようということやった。また、それをきっかけにして価値感も変わったね。それまでの組織・団体中心の遅れた意識から、学園紛争後、今度は高度成長の社会になって個人中心の物の考え方が生まれて来たわけで、核家族のマイホーム主義であるとか、親は親・俺は俺という様子が世の中が変わって来た。それとともにやっぱり探検部も変わった。それからですよ、賑やかにパート制が生まれ、探検部がより一層強力になったのはね。

松原 今の現役、特に1・2年生はパート制と言われてもピンと来ないと思うけど。

室沢 入部した時からどのパートに入るかを決めて、ずっとそればかり続けるものと聞いていますが、その目的とかそういうことは……

小野 先ず私が技研、山岳技術研究会というものを作っったんや。その頃はまだエベレストも登られていない時でね。そういう技術を探検部の中で高め伝えて行こうという意図やった。そして、そういう技術は学術調査でも必要なら、ボートとか潜水もといった調子で、それぞれ技術研究会を作るようになった。それは、仲の悪かった学術派と冒

険派が、あんまりケンカばかりしていてもしょうがないから、うまく分かれて活動するための一つの知恵でもあったわけやね。

村岡 山岳班、離島班、ボート班、洞窟班の4つで始まって、海底班が後からできたね。

水野 今は企画制でしょ。パート制から企画制に変わった時も一つの転機じゃなかったんですか。

渡部 私が入部した46年がいわゆるパート制の最後だったんです。結局パート制自体が終局に向っていたんですね。パート制の中で企画を立て、お互いに一つの目標に向かうという段階にもう行っていたわけですね。私が入った時には、あの海外遠征ラッシュを迎えて、その後の計画が出て来なかったんです。アマゾンにしても、その後が続かなかったし、山もアラスカでしたね、洞窟も青海湖周辺を最後に殆んど完成しつつある状態だったし、ボートはコロラドがあったわけだけれども、その後どうなるかを見越して、実際私らの代でも企画制企画制と言われていた。ところがその頃になると、各パートの技術も高度になってきていて、例えば洞窟にしても、3年間位やらんと技術が得られなかったわけ。そういう意味ではパート制と企画制が共存していた時期だった。しかしパートの中へ入ってしまうと、どうしても技術を究めることが先になる、これではいかん、企画が先に立ってそれを目的として技術を練習していけないといけない、というのがみんなの考えだったわけです。

小野 それはね、学生のやれる技術的なことの限界を極めたんじゃないかな。例えば技研の山登りだってね、ある2・3年は日本の学生登山の中でもね、最高の技術を持っていたよ。まして洞窟とかボートはね、それこそ日本では他についてくるどころがなかった。それを持續するのはね、メンバーが多ければ良いんだけれども、その頃にはもう探検部という名前に入ってくるということとはな

くなってきたわけだが、一時的にせよね。同好会でも結構同窓なんかやとったからね。高度成長の最も隆盛な時で、間もなく石油ショックが来たんやね。それから不況の底へ落ちて行って……ちやうど関大90周年の前やった。あそこもうちのクラブの変わり目の一つやったな。

松原 80周年は山岳部と合同でペルー・アンデス学術調査隊が派遣されたのに、90周年は派遣できなかったと聞きますが、その辺のことを。

小野 90周年の時には、それまで全部パート制で活動してきたわけだが、何か一番良い計画を、各パートのコンセンサスを求めてやろうということになった。その時に出したのが、北極海のエルズミア、フランスのグーフルベルガー洞窟、青ナイル航行、それと南米に行って一年間民族調査やろうという計画やった。

村岡 あれば探検部の負けいくさやった。と言うのは、80周年は意外と成功したから90周年を狙ったわけやが、何故80周年が成功したかと言うと、探検部の力が90周年の時ほど無かったからなんだね。だからこそ中谷学長や末永博士が中心となって動いてくれて、探検部の顧問教授団も結束したわけ。

渡部 そうですね。90周年の頃にはOBも充実してきたし。

村岡 OBも現役も歴史も、全てが80周年より進みすぎていて、ところが進んだから教授団や理事会の支援も出なかったわけやね。また言い換えたら、実際80周年以後顧問教授団にも理事会にも、探検部にとっての新しい財産が全く増えていなかった。杉原先生も横田先生も10年若かったわけ、80周年は。杉原さん隊長で行きましょう、加藤さんわし本部長やりましょう、中谷さん支援

しましょう、末永さんも現役で日本一の大学教授やと。それがもう中谷さんは学長退陣してはるわ、末永さんも引退してはるわ、ところが探検部の資産は増えてない。全然支援団体の強化をはからなかったわけやな。そして20数年経った今も、まだ創設時の教授団に殆んど頼ってるわな、これ。小野 結局限界はそこにあるね。うちの大学に文理学部のようなものが無いだけにね、探検の風土としては非常に弱い。

渡部 また、80周年をやる時には、90周年は動かないという方針があったわけで、関大90周年の名で探検部が活動するのはよろしいが、大学は何も出さないと。それがわかったのは90周年が1年か2年に迫った時でね、それまで現役全部を率いて計画案を出させてやっていたのでよく覚えてるんですがね。

小野 そうそう、あの時は準備期間を3年位おいていたからね。だからそれならば民間の寄付に頼ってやろうとしたら石油ショックが起こってね、ちり紙がなくなったりして、世の中低成長時代に移って行ったわけ。それでもその段階では没にはならず、最終的にグーフルベルガの洞窟とエルズミアが残った。そして、一番金がかかってものすごくえらい計画のエルズミアが選ばれた。エルズミア島の山登りに行く話やがな。しかし資金の問題などで結局挫折してしまったわけ。石油ショックの影響が大きかった、その頃君らは中学生くらいやったから経済的なことは分らなかったと思うけど、そりゃ日本人として大きなショックやったね。だから今こんな計画打ち出しても誰も真似面に見てくれない、関大の常識を疑われるだけだと。確か1・2年ヒマラヤ登山も日本はしなかったはずや。そんな時代だったから結局ボショッタ。まあそういう計画を堂々と打ち出せる程、探検部が強い組織だったとは言えるだろうけど。



渡部 やっぱりあの頃が一番力ありましたね。遠征だって毎年盛んに、ひどい時には年間2回大きな遠征に出ている時もあった。

小野 充実しきっていた。そして更に上へ行こうと思った時に石油ショック受けたんだね。

渡部 だから現役にしたら過去3・4年の経過を見れば、やれるものだと思っていたわけです。だからもう途方もない計画でも出してきましたよ。

小野 まあ90周年を打ち出しておきながら、そういう経過で実現しなかった。それが世の情勢のためとは言え、探検部の一つの方向性を見失なわせる状況に追いやったのは我々の責任や。だから私に代わって13代の松本がOB会長になった。新しい価値観で探検部を続けていかないとね。それまでの様なあり余る金と、いや糧入ってくる人間とでやっていた時代とは全然違う社会になってしまったわけよ。

松原 それではこの辺で、今後我々が活動が続けて行く上での問題に、話題を移したいと思います。先ず身近なところでは、毎年今頃になると秋の全体合宿を行うべきか否かで執行部が悩むんですけ

れど。

村岡 探検部で必要な基礎体力を作ろうと思ったら、全体合宿をやめたらあかんで。

小野 今の若者は、あらゆる事で過保護になっているんで、気遣いじみた歩荷なんかには不満も多いんだろな。

渡部 私等の時でも1・2年生が全員やめてしまったね、あれは本当にショックでしたよ。

村岡 私なんかは、やめたら損や、3年になったらやり返したろうと思ってね。(笑)

松原 現在比良ボッカをやるとして、1人50kg持てと言ったら、やらずしてクラブを去る人間が多いような時代になっていますが。

渡部 それぐらいの意気込みの強い者はやめてしまっても良いのじゃないか。

小野 拒否する者はやめさせれば良いという考えが、今までの探検部のやり方だったわけだが、何の為に比良まで行ってやらないといけないのか、という本質をみんな忘れていると思う。その目的をはっきりさせるのはリーダーの責任やな。

渡部 早稲田の45kg・関大の60kg——これは砂の重さなんです。こんな風な意味合いで、関大の探検部は体力トレーニングに基づいた、体力



を駆使した探検活動であったことは衆目一致している。

松原 他大学の話が出たんですが、現在多くの大学に探検部があり、情報交換なども盛んなのだけど、競技スポーツの様なライバル意識が無い為却って目的を持ちにくいと思うんです。

小野 他大学の探検部と比べて、それに負けなようにという考え方は納得できないな。あくまでも探検部の一つの在り方を求めて行くべきだと思うね。探検部の活動は自然をフィールドとして、それとどう戦ってきたかを、自分の心の中で評価し、自分の価値観、人生観を形成することに意義があるのじゃないかな。だから、他の大学と比べるとか、マスコミに載ることを目的にするというのは間違いだと思う。

高見 マスコミという事では、探検して得られたものを社会に還元する媒体として利用する必要はあると思いますが。

渡部 しかしね、マスコミの判断基準というものは時代によって変わってくるね。例えばヒマラヤの未踏峰に登るにしても、山そのものの高さは変わらなくても、あまり登られていない時代には大きく扱われ、技術が進歩して当り前のように登られている時代には当然低く扱われるわけやからね。だからマスコミを通してと考えると、より大きなことをやっていかないといけない。まあ探検ということ自体が、探検するフィールドを無くすることを目的にしている様なものだから、言ってみれば自分で自分の首を絞めてるんだけどね。

小野 探検という自分自身の心に描いた地図を、塗りつぶしていつてるわけや。私なんかは、ヒマラヤへ行きたいという目的があったから、大きな空白がポカッとあいたままになってしまっている

けどね。

水野 今の1年生の中には、そういう目的も無しにただ漠然と海外へ行きたくて入部した者もたくさんいます。

渡部 その辺が私には不思議で仕方ないんですが、昔は探検部というものは海外へ行く手段であり、勧誘のキャッチフレーズでもあったわけだけど、今は探検部に入らなくても自由に海外へ行ける時代なんですよ。もっと違った夢があっても良いんじゃない。

村岡 私らから言えば、月へ行くぐらいの夢を持っていたとしても良いと思う。

藤田 僕も探検部でしかできない大きなことを、自分なりに見つけてやってみたいと思っはいるんですけど。

渡部 自分自身の目的意識をしっかりと持って活動していくことが一番大事だと思うね。今後どんなことをやったらいいのか、これが1・2年生の共通の悩みなんだけど、それは本当はおかしいのであって、やっぱり自分自身がこういうことをやりたいと思って入部するのが純粋な探検部の在り方なんです。その辺を見失わずに、自分の目的というものを自分で探して、自分で掴んで、それに向ってどういう過程を踏んで、目的を完遂するかを個々がしっかりと考えていくべきだと思うね。今の現役がそれを持てずにいるんじゃないかということが不満やね。

水野 やっぱり、同じやるからには死ぬ気で取り組めるようなことを見つけないでですね。

小野 いやあ、死ぬ気でなどというのは江戸時代の人間のやる探検だね。1年間毎週毎週集って、あらゆる危険について検討し、完全に用意周到にして行動するのが関大探検部のやり方なんです。

松原 そろそろ時間も残り少なくなってきましたが、先輩方が我々に望まれることを最後にお願います。

村岡 現役生活は長くても8年、普通は4年やな。その4年間の探検部活動の中で、やっぱり一生の糧となるような心の財産が残るようにしてほしいね。

小野 人の評価はどうでもいい、自分達が何を本当に身をもってやってきたかが大事なんだ。探検部で何かを得て、探検部にいたということを勲章として世に出て行って欲しい。関人に入って良かった、探検部に入って良かったと言えるように頑張りたいね。

村岡 現役の間はがむしゃらにやって欲しい。まあ言葉としてはおかしいかも知れんが、秩序のある、限度の無いがむしゃらを心掛けて思いきりやることやね。

松原 今日は、現役が聞く側にまわってしまった

という感じやけど、この機会に何かOBの方に言っておきたいことはないか。

室沢 僕としては、もっとOBに参加していただきたいという気持ちです。探検委員会とか、今日のような場だけじゃなく、実際の活動にも参画していただいて、いろいろな経験や技術を伝えて欲しいと思います。

織田 OBの方の話を伺って、時代の流れを非常に感じました。昔の探検部に入っていたらもっと回りに活気があったように思えます。僕も何か大きなことをやって大学生生活を充実させたいと思います。

小野 まあ部員名簿見てね、我々の所へどんどんいろんな話をしに来てくれたらいいんよ。

松原 どうもありがとうございました。我々も、今日の先輩方のお話を肝に銘じて、明日からの活動に一層励みたいと思います。

どうもお疲れさまでした。

